

声が流れるのだった。顔をあげて、無数の眼が、青空を眺めていた。

X氏は、おびたらしい雨と青空という声をききながら、光の独楽が廻る空を眺め、中空に漲っているエネルギーの塊りが大量の水を蒸発させていく光景を眺望した。街には、笑う眼、恍惚の眼、快楽の眼、そして法悦の眼までがあふれていた。心があぶないばかりに、頂点にのぼりつめ、その絶頂で爆発してしまいそうなくらい、眼に力がみちていた。

X氏は、土曜日の仕事が終わるのを待ちかねて、女の診療室を覗いた。

——待ってたわ

——青空だね

——あら、どうかしたの

——何が？

——変ね。眼がとても変ね。あなたの眼じゃないみたい

——いつもの眼だと思っけど

——いいえ、ちがうわ。少なくともあなたのいつもの眼ではないわね

X氏は、女が一步退いたような気がした。

——なにかあったのね

——光がまぶしすぎて

——突然変異した動物みたい

——そんなにおかしいかい

——あぶないほどの眼よ

——とにかく、明日は海だ

——約束は約束だけど。ちょっと気になるわね、その眼

——1秒だって遅れはしないよ

——T駅の銀の鈴、知ってるでしょう

——ああ

——十時にしましょうか

——わかった

——本当に、来てね

——明日、待ってる

——さようなら

——さようなら

正午だ。動く手がとまった。100日振りの青空だ。誰だって、頭のなかは、日曜日のプランでいっぱいだ。1日中、アウトドアーで、何をして、何処へ行って、誰を誘って、想いがぐるぐる廻って